
ヴァルハラの輝石

神威メルブラ勢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァルハラの輝石

【Nコード】

N4906F

【作者名】

神威メルブラ勢

【あらすじ】

ゲーム好きの男子高校生、くろしゅつしんや 駆流神耶がある出来事により異世界へと飛ばされるお話です。突然異世界へと放り込まれてしまった神耶に明日はあるのか！？え？冒険者になる！？ギルドをつくるっ！？基本コメディです。

ぶろろーぐ（前書き）

えゝ、ほかの小説が停滞気味なのに新しく執筆を始めてしまいました。 ^^ ;

もしかしたらこっちも更新遅くなるかもしれませんがよろしくデス。

ぶろろーぐ

第0話　ぶろろーぐ

キンツキキンツ！

ズバツ！

刀の鏝迫り合いの音の後、確かな手ごたえと共に多量の血飛沫が虚空に舞う。

また一人、目前の敵を切り倒した男は殺した男には目もくれず、ただ前方を睨む。

目の前には幾千もの敵の姿。

今までに切り殺した数は五百はくならず、そして目前に迫る敵は千はくならない。

周囲に援軍はなく、ただ一人立つ男と多数の敵の姿があるのみである。

絶体絶命、まさにその言葉がピタリ当てはまる光景である。

「「「はあっ！」「」」

周囲の敵達は個々の実力では敵わないと悟ったのか、人海戦術に切り替える。

それは古来より最も確実に相手を葬り去るための戦術である。

人的被害を考えず、その相手を倒すことのみに特化した戦術。ゆえにこの状況でのその戦術は最も適したものであるといえるだろう。

たとえその相手が、たった一人で五百という人間を切り殺した男であつたとしても、である。

キンッ！

カンカンカンッ！

ガキヤッ！

数多の金属音を鳴らしながら、それでも男は猛然と敵を切り殺していく。

どれだけ時が立っただろう・・・。

人海戦術を取った者たちに動揺が走りだす。

なんと自分達の数が千から七百までその数を減らしていたのである。なんという戦闘力であろうか。

カカアーンッ！

一際大きな音が止むと、今まで襲い掛かってきていた敵が動きを止め後退する。

そしてその中心あたりより、真つ赤な鎧を身に纏った大男が顔を見せるのだった。

この部隊の隊長のお出ましである。

「くっくっく、まさか俺の部隊がここまで崩されるとは思っておら

なんだわ。」

隊長は愉快そうに笑みを浮かべる。

その双眸は、殺しを生きがいとする者の眼をしているのだった。

「礼といっては何だが、我が貴様に引導を渡してやろう」

そう大男は言うつと、

「死ね」

その一言とともに手に持った大剣を振り下ろすのだった。

ガキッ！

男は辛うじて自らの刀でそれを受け止める。

そう、自らの全体重を使ってその一太刀を受け止めた。

それがただのフェイントであることも知らずに・・・。

「ふっ、残念だったな！こっちが本命さ！」

大男はそういうと左手に持っていた大きな斧を男に向かって振り下ろしたのだった・・・。

・ ・ ・ ・ ・

・

チャララララン・・・

そう、敗北を知らせる効果音が流れる。

目の前には GAME OVER の文字が。

俺は一つ溜息をつき、ゲームのコントローラーを置いた。

俺の名前は 駆流 神耶（くりゅう しんや）

目下の目標はこの『ヴァルハラ』をクリアすることである。

『ヴァルハラ』は先月発売されるや否や1ヶ月で10万ヒットという、前代未聞の超大ヒットを記録した作品である。

主人公は各々能力を持つ人間となって、目の前の敵をなぎ倒していく。

最終目的は未だ不明。

このゲーム、超難易度でも知られる作品なのである。

「ちえ、いいところまでいったんだけどなー。」

そっついながら俺はテレビの電源を落とし、部屋の電気を消しリビングへと降りていくのだった。

ぶろろーぐ（後書き）

王道の異世界迷い込み小説が書きたくなっただんです。
それ以外とくに理由はありません。^^；

美形3人組（前書き）

えゝ、まだ異世界に飛んでません。^^；
主人公の日常の部分です。

えゝ、次話で飛ぶ予定なんでどうかお許しを。^^；

美形3人組

第1話『美形3人組』

チュンチュン、チュンチュン

ある世界のある星のある場所での光景。

そこには、朝の日差しを浴び、ベッドの上で丸くなりながら寝ている少年の姿があった。

少年の容姿はひどく整っていた。

否、整いすぎている、というべきかも知れない。

個々のパーツは小振りでありながら、それぞれが完璧な形で少年の小さな顔に収まっていた。

その中で、眼だけは強く大きく、まるで意思を持つように爛々と光を帯びるのだった。

少年の髪は見る者を惹きつけるような漆黒。

少年の纏う雰囲気はどこか神々しさすら感じさせる。

「ううーん・・・」

少年はそう、気持ち良さそうに唸る。

そして徐に眼を開けるのだった。

その瞳は、彼の髪と同じ漆黒である。

「んー、よく寝たー！」

今日は月曜日。

休み明けと言う、とても気の滅入る日なのだった。

尤も、本来学生というものは勉強に励むべきであるのだが。
現代の学生にそれを求めるのは流石に可哀想である。

「今日から学校かー。だるいなー。」

そう愚痴りながら着替えだす『少年』、こと 駆流 神耶であった。

・ ・ ・ ・ ・

神耶は階段を降り、1階のリビングへと歩を進める。

1歩1歩ゆっくりと、しかし確実に。

そうして5分ほど歩いただろうか、目の前にリビングへと続く扉が見え始める。

なぜ部屋からリビングまで5分もかかるのか、と皆不思議に思うことだろう。

答えは簡単、神耶の両親はいわゆるお金持ちであった。

世界有数のデザイナーである。

その2人は、自身の家も大豪邸と呼べるものを自ら設計し、作ったのだった。

この5分というのは、豪邸に住む為の必要経費、もとい必要時間なのである。

そう、あくまで『だった』である。

両親2人は、去年の暮れに交通事故ですでに他界している。

「Good morning!」

そうリビングに神耶の声が響き渡る。

当然、返事はない。

なぜ英語だったのかというと、ただ神耶が英語が好きなかただけである。それは、以前留学していたということも大きな理由となっているのかもしれない。

「ふう、父さん、母さん、おはよう。」

そして神耶はリビングのすぐ隣にある仏間の仏壇に手を合わせる。
両親が死んでからの神耶の日課であった。

「さて、メシ作るか!」

I prepare meals! だね。」

そう、わざわざ英語でも言い台所へ駆けていくのだった。
え?

なぜ駆けて行くのかって?

そりゃー、登校時間が迫っているからである。

実は神耶、睡眠時間を確保する為、いつも限界ギリギリまで布団の中にいるのである。

その為、起床から登校までの猶予が15分しかないのである。

「うわー、今日はちよつと遅刻気味だ・・・」

I seem to be late!」

そう呟きながらそそくさと食事を済ませにかかるのだった。

・ ・ ・ ・ ・

ピンポーン

玄関の呼び鈴が、来賓を告げる。

「ああ、もうきたのか、いつもより早いな。」

そう言うと、神耶はインターホンをとることはせず、そのまま玄関へと歩きだすのだった。

手にはカバンを持ち、その身には学生服を纏っている。これぞ、日本の学生、といった井出達である。

・ ・ ・ ・ ・

一方、駆流邸玄関前では、なその少女達が立っていた。

片方は髪を金色に染め、スカートも膝程度まで短くしている。しかし、不良であるとかそういうことは一切なく、ただのファッションである。

もう一方の少女は、髪が赤く、眼の色は青く澄みきっている。こちらは染めているのではなく、ただ単に遺伝である。

そして2人に共通する特徴があった。

それは『特S級の美少女』であるということ、そして極度の『神耶信者』なのであった。

神耶の言葉は何であろうと信じ、神耶の一挙一動に眼を輝かせる、そんな少女たちなのである。

「ねーねー、鈴ちゃん、今日はちよつと早く着いたね。」

怒られないかな！？私、神耶くんに嫌われたら生きていけない！」

赤髪の少女が半泣きになりながら言う。

「ん、確かに早く着きすぎたか。

だが神耶のことだ、何だかんだといつてもすぐに出てきてくれるぞ。

「

そう言うのは、赤髪の少女に鈴と呼ばれた少女である。

見た目より少し低めの声に、男っぽい口調である。

「葉、そんなことを考える暇があるのなら、今日一日どのようになれば神耶が気持ちよく、快適にすごせるか考えておけ。

そのほうが数倍有意義だ。」

そう、鈴と呼ばれた少女は赤髪の少女に言うのだった。

「そうだね！私達のいる理由は神耶くんに楽しく学校生活を送ってもらったためだもんね！」

そうして、葉と呼ばれた少女は気を取り直したのだろうか。嬉しさを顔全体で表現するかのごとく極上の笑みを浮かべるのだった。

「2人ともお待ちせ！」

そうこうしている間に、2人の待ち人が颯爽と姿を現す。

駆流 神耶 その人である。

「神耶くん！おはよう！昨日はよく眠れましたか！？」

「神耶、おはよう、今日もいい天気だな。」

2人の少女は同じ朝の挨拶だが後半の内容はそれぞれまったく違うことを言うのだった。

「ああ、2人ともおはよう。

昨夜はこないだ手に入れた『ヴァルハラ』ってゲームをやったからちょっと遅かったかなあ……。

でも、それなりに疲れは取れたよ、葉？

そして鈴、こんな寒空のしたそんなことを言っても説得力に欠けるね。」

そんな2人の言葉にも、神耶は律儀に答えるのだった。

・・・言い忘れていたが今の季節は冬である。

「そうですか？

本当に体壊してません？

調子悪かったら私がずっと看病しますから！」

そう、少し壊れたように葉が宣言する。

それをみた鈴は少し苦笑をもらしながら、

「ふふつ、人目もはばからず大胆だね。

でも私も同意見だからね、神耶？

というか私達的には風引いてくれたほうが役得かも・・・。」

後半、不穏な言動を見せる鈴に、今度は神耶が苦笑する番だった。

「ははっ、看病してくれるのは嬉しいけど、風は引きたくないからね。

体調管理には気をつけるよ。」

そういう話をしながら3人は学校へと登校していくのだった。

周囲の人たちに、2人の美少女が1人の美少年に寄り添いながら楽しそうに登校する3人の姿が目撃されたとかされなかったとか。

迷い込みのきっかけ（前書き）

えと、異世界へ飛ぶ、と散々言った割にごめんなさい、飛びそうにありません。

ぜんぜん話が進まない。^^；

明日から学校なんで次回更新は次の土曜日かな？

迷い込みのきっかけ

第2話『迷い込み』

キン〜、コーン〜、カーン〜、コーン〜

鐘の音が学校内に鳴り響く。

尤もこのご時世、未だ本物の鐘を使っているはずもなく、鐘の音を模倣した電子音が、であるが。

「もう、こんな時間か。

では今日はここまで。

日直、礼を。」

教壇に立ち、授業を進めていた教師がそう生徒達に告げる。

「起立、礼!」

教師に言われ、号令をかける日直。

「ありがとうございました。」

「「「ありがとうございましたー!」」」

教師の礼に答える生徒達。

この瞬間、本日最後の授業が終わりを告げる。

それは、ドコにでもある普通の光景である。

もちろん、学校という限られた空間でのことではあるが。

そして、足早に去っていく教師と慌しくなる教室内。

友人と話し出す者。

片づけを始める者。

板書の残りをする者。

黒板を消し、板書中の生徒に文句を言われる者。

今日も教室内は喧騒の空気に包まれていた。

これも、ドコにでもある光景である。

そしてその場に、朝の3人組はいた。

周囲の視線を受けながら、本人達はあまりそれに気づいていない。

幼い頃からその視線を受けてきた3人にとって、『それは当然のこと』と認識しているのかもしれない。

「つかれたー、英語以外は。」

「ほんと、休み明けはキツイねー、特に英語は。」

「そうですねー、ちょっと寝てしまいそうになっちゃいました・・・
、英語は特に。」

そう、3人は溜息を漏らす。

今の3人の言葉でも分かるように、神耶以外の2人は英語が得意ではない。

否、正確には葉は英語もそれなりに出来るが、彼女自身理系の科目のほう得意なので、英語はあまり好きな科目ではない。

とはいっても、神耶の好きな科目である為、平均よりは良い点数を取るように努力しているのだが。

そして、鈴は専ら運動専門である。

勉学に3以上の成績がついたことはなかったりするのである。

体育はいつも5であるが。

そうして愚痴を言い合う3人だったが、やはりダルそうに体を捻っている。

3人の顔には、少量の疲労の色が見て取れた。

流石に休み明けの7時間の勉学は、彼らに疲労を与えるのに十分だったようである。

かといって、この3人に限ったことではなく、皆多かれ少なかれ疲労を覚えているようであるが。

「さて、2人は放課後なにか用事ある？」

と、問いかける神耶。

「いえ、特にないですねー。」

強いて言えば神耶くんの家にお邪魔する予定を入れています。」

と、少々のボケをいれながら答える葉。

「私は少し道場のほうを觀ようかと思っている。」

と、答える鈴。

言い忘れていたが、彼女の家は道場を開いている。

彼女は、割と親思いなのだった。

葉も親思いなのだが、以前手伝いをしていると、天然なのでミスを連発。

以後手伝い禁止令が出されたのだった。

「鈴は道場か。」

じゃー葉、俺の家に招待するよ。

鈴も招待したかったが、仕方ないね。」

と、ごく普通に言う神耶。

周囲の視線は、『天然！？』『もしかして、こんなところで修羅場がおきる！？』などといった声が漏れ始めている。

どうもこの神耶という少年、家に招待されることがこの少女2人にとってどれほど大きなものなのか、理解していないようである。

本人は『久しぶりに呼ぶか！』程度にしか考えていない。

「いいの！？」

やったー、じゃーすぐに行こう！」

と、はしゃぐ葉。

「なにっ！？」

それは一大事！

指導などやっている場合ではないな。

私も、是非招待してくれ、神耶。」

そう言つて、神耶に言い出す鈴。

『おいおい、家の手伝いはどうなった……。』という周囲の視線も物ともしない。

「道場のほうは大丈夫なのか？」

至極尤もな意見を述べる神耶。

「ああ、そこまで急ぐ用事ではないからな。
帰ってからでも問題はない。」

と、これまた新事実を述べる鈴。

『嘘くせー！？』とは周囲の心の声である。

一方、周囲の視線が呆れの要素を含むことを、葉は横で傍観しながらも感じ取っていた。

尤も、それを2人に言うつもりなど毛頭なかったが。

それどころか、どこか微笑ましいものを観るかのような視線で、2人を見つめる。

結局のところ、葉という少女は鈴という少女のことも大好きなのであった。

「んー、ならいいかな。」

じゃー、Let's go!」

「ya-!」

と、かみ合っていない返事をする2人に苦笑しながら、神耶は教室の扉を開くのだった。

・

・ ・ ・ ・

「にしても、よく考えたら2人を家に招くのって久しぶりだねー。」

校門を出て、少し歩いたところで神耶は言った。

確かに、依然招いたのは記憶が正しければ両親が亡くなり、葬式が終わった次の日だったはずである。

もちろん、2人も葬式に参加していたが、親戚ではない以上、あまりかわることは出来なかったのである。

「うん．．．、かれこれ1年になるね。」

「ああ、そうか．．．、前に家にいったのは．．．。」

神耶は、2人の言外に『ご両親が亡くなられた直後だったから．．．』というものがあるように感じた。

「そんな暗い顔するなつて。

俺は2人に感謝してるんだからさ。

親父達が死んだ時、いつも傍にいて助けてくれた2人にはさ。」

そう言つて2人の頭を撫でる神耶。

以前、あまりにも綺麗だったので撫でさせてもらったとき、気持ち良さそうにしていたのを思い出したのである。

「あつ．．．。」

「ふふっ……。」

予想通り、2人は至福のときを楽しむかのように満面の笑みを神耶に向けるのだった。

そう、そういうことをしていたから、前から来るトラックに誰一人気づかなかった。

信号無視をし、すごい速度で突っ込んでくる鉄の塊の姿に……。

「あ、危ない、君達!!!!!!!!!!」

はじめにそれに気づいたのは近所のおじさんだった。

その声に3人は顔を上げる。

3人の中で、はじめにその事実を認識したのは神耶だった。

「!?!?!?!?」

明らかに今から回避行動をとっても助からない。

助かったとしても、自分だけだろう。

ほかの2人はまだ何が起きているかしっかりと理解できていない。そう、瞬時に頭の中で考える。

「くっ!」

その後の神耶の行動は早かった。

恐怖に固まる体を奮い立たせ、自分のとるべき行動を瞬時に把握、行動に移す。

ドスッ！

「キャッ！」

「ッ！」

咄嗟の判断で、神耶は2人を横に突き飛ばす。
それが意味することはただの一つしかない。
目前にはトラックが迫る。

そう、自身の身を犠牲にする覚悟が無ければ出来ないことだった。
それが出来たのは、ひとえに2人に助けられた日々を覚えていたからに他ならない。

『自分が今度は恩返しをする番だ』それだけが神耶を動かす原動力となっていた。

『ああ、俺は死ぬのか・・・。

父さん、母さん、そっちに行く事になりそうだよ・・・。』

神耶は自らの死を認識し、それを受け入れる。

キキーツ！

今頃神耶に気づいたのか、トラックが遅すぎるブレーキを踏む。

だが、すべてが遅すぎた。

今までの速度が急に0になるはずもなく、慣性をもった鉄の塊は容赦なく神耶の体を打ちつけるのだった・・・。

迷い込みのきっかけ（後書き）

えゝ、前話で次回異世界へ飛びます、って書いた割にほんと関係ない話で終わってしまいました・・・。

まあ、本当に次話で飛びますのでどうか一つご勘弁を。 ^^ ;

出会い（前書き）

えと、なんか構成ができたもので。^^;
続きが書きたくてつい更新しました。
楽しんでくれてる人いるのかなあ？^^ノ

出会い

第3話『出会い』

チュンチュン、チュンチュン

鳥の囀り声を耳元で感じながら、神耶は眠そうに目を開ける。
目の前には数羽の小鳥の姿。

周囲は緑に囲まれ、至る所から小鳥の鳴き声が聞こえる。

木の根元には色とりどりの花々が咲き乱れ、草地の葉は青々と生い茂っている。

その傍には小川が流れ、そこには多くの魚が清流に身を任せている。
季節はもうすぐ冬にさしかかろうと言うのに、肌寒さをまったく感じさせない。

「って、ちょっと待て!？」

と、やっと意識がハッキリとしてきたのか、取り乱し始める。

「ドコだよここ!？」

Where am I? だよ!？」

ってか何!？」

俺死んだんじゃないの!？」

と、周囲に誰もいない事を良いことに一気に自身の思いを吐き出す。

確かに、トラックに撥ねられ死を覚悟した直後である。

その直後、この光景を見ることになったら誰でも取り乱すとは思
うが。

「何なんだ・・・？」

俺、さつき確かに交差点でトラックにひかれたはずだろ・・・？

しかもドコだよここ、完全に森の中じゃないか！？」

ブツブツブツ・・・

そう言うとき神耶は独り言を始め、自身の現状把握に全力を注ぎ始
める。

神耶の思考はとどまる事を知らず、その後30分ほど思考に没頭す
るのだった。

・ ・ ・ ・ ・

神耶の脳内思考

とりあえずあの時の状況を思い出すとしよう。

何事も状況把握が大切だと思う。

キキーツ！

突っ込んできたトラックのブレーキ音。

それが俺のこの地球という生の世界で聞く最後の音である。

あまりにも素っ気なく、あまりにも呆気ない終焉。

17歳というあまりにも若すぎ、そして無意味な終わりである。

そう、死を間近に控えた俺は自覚、認識していた。

しかし、当の俺はさほど嘆くということをしようとは思わなかった。葉と鈴を助けられたという達成感からか、自分が死ぬと知っても然程も恐怖は浮かんでこない。

その瞬間の俺を見た者はいなかったが、その表情は安堵の色に染まっていたという。

あの時の状況にナレーションを付けるとなるとこんなところだろうか。

まったく、これはいったいどういうことだよ……。

どう見てもここは交差点じゃないし、その前に俺が生きているだって？

あの速度のトラックに撥ねられたんだ、生きているとは到底思えない。

だとするとここは天国、なのか？

地獄ってことは……、無いな、あの光景が地獄にあるとは思えない。

だが天国に行く前に、閻魔様の篩い分けがされるんじゃないかったわけ？

・ ・ ・ ・ ・

そして30分後。

結局、ほとんど何も答えを導くことが出来ぬまま時間だけが過ぎたのだった。

「ふう、ダメだ、まったく纏まらない。

一番可能性が高いのは天国って可能性だということぐらいか。」

と、現状一番可能性の高そうなものを上げてみる。

「ゲームとかでは衝撃を受けて異世界に、って言うのが妥当なんだけど・・・。

流石にそんな都合のいい話無いよな、どう考えても可能性はとても低いな。

The possibility is very low . だ。
「

見知らぬ地に来て、神耶の英語は健在である。

そうこうしているうちに、ある程度の余裕が出てきたのだろうか。

「ここにずっといても仕方が無い。

とりあえずこの川を沿って下ってみるとしよう。

ゲームとかでも川に沿って歩くのはセオリーだし、町があるかもし

れない。」

と、若干の趣味から得た知識を活用しながらそう結論づけた神耶だった。

そして、そばにあった手ごろな長さの気の棒を拾い上げる。

「無いよりはあったほうがいいだろ。」

流石に虎とかが出てくるとは思わないけど、何が出てくるかわからないしね。」

と一言呟いた後、神耶はトコトコと下流へ歩き始めるのだった。

数時間後、この選択が神耶をある1つの出会いに導くこととなるのである。

だがこのときの神耶に、それを知る術はないのであった。

・ ・ ・ ・ ・

そうして歩き始めて2時間後。

「疲れたー！」

そう突然叫ぶ神耶。

そして、そばにある木に寄りかかりながら大きな溜息をつくのだった。

「何でも無いのさ!？」

そうなのである。

当初予測していた町の姿は未だ見えず。

それどころか村でさえ発見することが出来ないのだった。

当初、真上から燦々と照りつけていた太陽は西に傾き始め、神耶の傍に小さな影を作り始める。

この気候を考えると春から夏にかけてであると予測しても問題ないだろう。

尤も、この世界に四季というものが存在するのであれば、であるが、流石に風邪を引くことは無いだろうが、出来るだけちゃんとした休憩を取りたいと思う。

そんな時である。

「キャーーーーッ!」

女性の悲鳴が森に響き渡ったのは。

その悲鳴は命の危険を訴えるように鋭く、切羽詰る状況が感じられた。

「な、なんだなんだっ!？」

「what!?!だよっ!?!」

半ばうつうつと眠りかけていた神耶はその悲鳴に飛び起きる。
そして、抱え込むようにして持っていた気の棒を握り直し、

「女性の悲鳴・・・、助けに行かないと！」

実はこの神耶という少年、弱いもの虐めは許せない性質なのであった。

女性や子供、お年寄りなどに危害を加えようとするものは例外なく止めに入るほどである。

そして今回も例外ではない。

というより、神耶にとって例外など無いのであった。

異常な状況下であるにもかかわらずほぼ反射の勢いで走り出す。

今まで慣れない足場に苦労していたとは思えない速度で、悲鳴の聞こえたほうへと駆けていく神耶。

そうして走って1分ほど、目の前に小さく開けた草地が見えてくる。

その場には数人の男性の姿。

そしてその足元には女性の姿が見える。

その場には押されて転倒したのだろうか、足を押さえながら泣きそうになりながらも男達を睨む女性の姿があった。

腰までとどくかという髪の色は輝くような金色。

男達を睨む双眸は透き通るような青。

小さな顔に大きな眼を備え、どのパーツも完璧すぎるほど整っているのだった。

流石の神耶も、

（これは・・・、鈴と葉に匹敵する容姿をしているじゃないか）

と、感嘆の声を（心の中で）あげるのだった。

そして神耶はその速度を落とすことなく、女性と男達の間を走りこむ。

「ちょっと、ごめんね。」

そう女性に一言。

走り込むなり、神耶は女性を抱きとめ男達と距離をとる。

突然抱き上げられた女性は、何が起こったのかわからないような眼で神耶を見上げる。

そして神耶のその美貌（男に使う言葉なのか？）に見とれ、頬を赤く染めるのだった。

出会い（後書き）

えと、次の更新は土曜か日曜になります。
・・・たぶん^^;

自然魔術と古代魔法（前書き）

予告どおり更新デス！

いやゝ、予定通り更新できるっていいですね！

そして3連休も！

これで受験さえ無かったら・・・。^^；

そしてもうすぐ期末テストです。

停滞するかも知れませんがご了承ください。；；；

自然魔術と古代魔法

第4話『自然魔術と古代魔法』

時が止まった。

否、正確には神耶以外の人間の時が、である。

女性は神耶に見惚れ、剣を持ち女性に立ちはだかっていた男達は、突然の乱入者に固まっている。

その期を逃す神耶では無かった。

今まで伊達に葉と鈴の友人をしてきただけのことはある。

あの美貌を持つ2人である、当然ファンクラブなどと言うものもある。

ファンクラブからの嫌がらせは日常茶飯事。

ファンクラブならまだ良いほうで、なかには親衛隊などという物騒なものも極秘裏に作られていた。

この親衛隊、実力行使で敵と認識したものを排除しようとするのである。

勿論、神耶は親衛隊ブラックリストNo.1の最重視ターゲット、日常的に狙われるのであった。

そのおかげというのも変な話ではあるが、殺気を感じ取りそれに対処する能力には自信がある。

そういう経験のおかげで、神耶は次の行動へとスムーズに移ることが出来た。

ある意味親衛隊様様である。
まったく感謝など感じないが。

「走るよ！」

そう未だ復帰しない女性に声をかけ、神耶は走り出す。
勿論女性は抱き上げたままである。

実は神耶に戦う気など毛頭無かった。

学校の体育の成績は良かったが、戦う術を持っているわけではない。
ここがどこなのかは分からないが、こういうことをしようとするぐらいである。

ある程度の腕はあると踏んだほうがいい。

神耶はそう考えていた。

そしてそれは圧倒的に正しかった。

ただの1つ、この世界の常識を神耶が知らなかったということ以外は。

「はっ！？しまった！？

追え！追うんだ！」

混乱から復帰した男は、周囲の未だ固まっている男達に喝を入れる。
男達は一瞬戸惑ったが、すぐに状況を理解し神耶たちを追いかけ始める。

「さ、流石に親衛隊たちとは動きが違った！」

神耶は吐き捨てるようにそう言い、走る速度を上げる。

その時である。

「ストーンウォール！」

先ほどの男の一人がそう叫ぶ。

すると、神耶の目の前に大きな石壁が突如として現れる。

神耶は急ブレーキをかけ、何とかその壁にぶつかるのを免れる。

神耶の知らない常識、それはつまり魔法の存在であった。

魔法という一点、それさえなければ逃げ切ることも出来ただろう。

しかし、目の前にこの石壁がある限り、これ以上走り続けることは出来なかった。

見た感じ、それは木の棒などで破壊できるほど低い耐久力ではなさそうである。

そしてそれは同時にある1つのことを意味するのだった。

「ふう、散々走らせやがって！」

「死ぬ覚悟はできたか・・・？」

「・・・・・・・・」

つまり追っ手に追いつかれるという事である。

3人の追っ手は（男達は4人だった。）若干息を切らしながらも、神耶たちに追いつく。

「・・・あれ？」

これはもしかして絶体絶命？」

神耶は冷や汗をかきながらそう言う。

「右よ！」

その時、腕の中にいた女性が声を上げる。

神耶は咄嗟に右へと跳び、しっかりと女性を庇いながら渾身の力で体を投げ出す。

「ファイアーボール！」

先ほどの魔術師が数個の火の玉を神耶達に向かって飛ばしていた。もし、女性の一言がなければ当たっていたことだろう。

神耶達によけられた火の玉は、石壁にぶつかり大きな音を立てながら四散する。

そして、火の玉が当たってもビクともしない石壁に、舌打ちをする神耶。

これで石壁を破壊するという案はやはり無理であることが証明された。

神耶はまたも冷や汗をかきながら女性のほつを見る。

とうの女性は、相変わらぬ美貌を携えながら神耶を睨む。突然睨みつけられ焦る神耶に、女性はこう言うのだった。

「何で出てきたのよっ!？」

あなたが出てきてもどうすることも出来ないでしょう!？
みすみす死ぬようなことをしなくてもいいじゃない！」

どちらかというと叫ぶというほうがしっくりくるものだった。
開口一声、怒声の応酬である。

流石の神耶もこれにはタジタジであった。

「それは出来ない。」

俺は女性を助けず見殺しにするなんて事できないから。その結果死ぬことになったとしても。

俺は行動を起こさず生きるよりも行動を起こして死ぬよ。」

しかし神耶はそう、本心を女性に告げる。

この世界でこのような考え方をする人間はいないのだろう。もしくは圧倒的に少ないようである。

女性は眼を見開き、信じられないモノでも聞いたかのように神耶を見る。

「あなたはそれでいいの・・・？」

私を助けようとして、死ぬことになるなんて・・・。」

先ほどの言葉とは逆に、今にも消え入りそうな声で女性はそう言う。

「当然だ。」

さっきも言っただろう。

たとえ他人であったからといって、殺されそうな女性を見殺しになど出来ないよ。」

「・・・・・・・・・・」

そう答えると女性は黙り込んでしまうのだった。

神耶の考え方に、言葉が出ないだけかも知れないが。

「さて、死ぬ覚悟は出来たかい？」

嬢ちゃん、邪魔をしてくれた少年？」

そう、無慈悲に神耶達に告げるのは先ほどの魔術師だった。
やはりここは異世界なんだな、と神耶はどうでもいいことを考える。

「いいえ、この人のおかげで考えが変わったわ。
最後まで足掻かせてもらう！」

そう言つて女性は呪文（？）を唱えはじめる。
その姿は、心を落ち着かせながら自身の何かを感じようとすること
のようだった。

実際には魔力を、であるが。

「Light, protect us!（光よ、我らを守りたま
え!）」

そう女性が叫んだかと思うと、神耶と女性の周りに薄い円形の膜の
ようなものが形成される。

「なにっ!？
エンシエントスペルだっ!？」

先ほどの魔術師風の男が驚いたようにそう叫ぶ。
見ると、周囲の男達も皆同様に驚いているようだった。

「短縮は出来ないけど、なんとか発動できた、か……。」
女性は息を荒くしながらそう言う。

「あなた、これでしばらくは何とかなるはず……。」

その間にどうするか考えましょう。

古代魔法はあの魔術師には打ち破れないはずだから……。」

しかし神耶は、その声を聞いてはいなかった。

（今は……、英語！？

英語で、魔法が発動した！？

しかも古代魔法……？どうなってんだ？）

そうなのである。

女性が唱えたもの、それは確かに英語だった。

「ねえ、聞いてるの？

私は魔法使いだけど攻撃魔法は使えないの……。

完全に補助魔法しか使えない。

時間は出来たけど、この防御壁もしばらくしたら消えてしまう。

でも、この石壁よりは持続すると思うから石壁が消えたと同時に全速力で走りましょう。」

女性はすこし楽になったのか、息を整えながらそう続ける。

しかし神耶の脳裏にはある1つの事が浮かんでいた。

つまりは古代魔法を使えるかもしれない、ということである。

「あのさ、1つ試したいことがあるんだけど。」

そう女性に告げる。

「何？

この石壁が消えるまでなら話ぐらい聞いてあげるわよ。」

と、女性もまさか神耶が使っなどと思っていない為軽い口調でそう答える。

「いや、その古代魔法って言うのは難しいのか？」

「古代魔法？」

ええ、魔術師の中では最高位といわれてるわ。

古代魔法、俗に言うエンシェントスペルを使えるものは魔法使いと呼ばれるの。」

と、少し自慢げに語る女性。

「難しい、というのはその呪文がってこと？」

と続ける神耶。

「ええ、そうよ。」

それと消費する魔力が自然魔術とは比べ物にならないの。
平均して10倍〜100倍もの消費量があるの。」

と説明してくれる女性。

「なるほど。」

じゃ、石壁が消えるまで試してみますか。

この結果みたいなものが消えるまでは、向こうからの攻撃は一切受け付けないんだよね？」

「そうよ。」

まあ、唯一例外があるとすればそれ以上の魔力を伴った魔術をぶつけることね。

もしくは古代魔法の『解呪』の魔法を唱えられさえしなければね。
一定時間内は一切攻撃を受け付けないわ。」

そつ、律儀に説明してくれる女性。

「そうか。

じゃ、最後に1つ。

貴女の名前は？ちなみに俺は、神耶だ。

駆流 神耶。」

いままで一番気になっていたことを聞く。

流石にいつまでもあなた、では違和感がある。

「クリユウ シンヤ？

変な名前ね、そして長い。

私の名前は クリスよ。

クリステイナー・C・スティルアよ。

私も長いけどね。

皆にはクリスって呼ばれてる、いや、呼ばれてたって言うほうが正しいね。」

と、最後に暗い顔で言い直す。

どうやら何か複雑な理由があるようである。

「そうか、俺は神耶って呼ばれてる。

尤も、今その名を知る人間はクリスしかないけどね。」

とこの世界にきて初めて名乗るので当然ではあるが、知らない者が聞けば誤解を受けそうな言い回しをする。

尤も、神耶に自覚は無いが。

「そう・・・。」

よろしく、シンヤ。」

と、案の定誤解したようであるクリス。

「ああ、よろしくクリス。」

と、そのクリスの様子に気づかない神耶。

2人とも、生きるか死ぬかの瀬戸際にいるとは思えない対応だった。
・・・2人とも忘れていただけだったのだが。

「じゃ、ちよつといってくるよ。」

そう言って、結界の境界まで歩いていく神耶だった。

・ ・ ・ ・ ・

結界とそうでないところの境。

そこに神耶は立っていた。

目の前には、どうにか結界を破壊しようとする4人の男達の姿。

「小僧！

さっさと出て来い！」

神耶の姿を見つけた1人の男がそう叫ぶ。

「悪いけど、出て行くわけにはいかないよ。」

そっつい、神耶はにやりと顔に笑みを浮かべながらこういった。

「さて、何がいいか。

一掃できるものがないな。」

そっつい、神耶は古代魔法を試す準備にかかる。

クリスがしていたように、心を落ち着けながら自分の中に巡る魔力を感じようとする。

・・・まったく感じる事が出来ないのではあるが。

尤も、古代魔法とは英語である。

神耶にとってはほとんど呼吸するかのように行う事が出来る（はず）である。

「The sky! A cloud! And it is God!（空よ！雲よ！そして神よ！）」

Answer my order!（我が命に答えたまえ！）」

And thundering cry of God!
!（神の一喝！）」

そう神耶が唱えた瞬間。

カッ！

辺りを眩い光が包み込む。

そして、その光が収まった瞬間！

バリバリバリバリッ！

ズドオオオオオーーーーーッ！！！！！！

幾つもの雷が辺りに降り注ぐ！

そして結界に守られる神耶とクリスを除く、すべての物を巻き込みながら蒸発、もしくは消滅していく。

男達は勿論、辺りに生い茂っていた木々、草花、転がっていた石、岩、男達が持っていた剣など。

すべての物が神耶の唱えた古代魔法によって消滅していく。

そして、クリスが張った結界までもが消えた瞬間。

一気にそのエネルギーを固体化するのであった。

消滅、といったが正確には少し違う。

魔力に換算され、この世に残るのである。

つまりこの固体化された物体は魔力そのものなのであった。

そしてそのエネルギーが完全に固体へと姿を変えたのだった。

目の前に出来上がったのは双剣、雪のように真っ白な白、漆黒というにふさわしい黒の2本。

それはまるで、明と暗、光と闇、善と悪を表しているように神耶には思えた。

そして神耶がその双剣に触れた瞬間。

カッ！

またしてもあたりを光が包み込む。

そしてその光が収まった時、その双剣は1つの指輪へと姿を変えていたのだった。

2つの宝石で装飾された美しい指輪へと・・・。

自然魔術と古代魔法（後書き）

感想＆評価お待ちしております。

神の御子（前書き）

期末テスト終わりました！

やっと執筆に戻れます・・・。 ^ ^ ;

といつても受験生なんで更新のほうは基本不定期という方をとらせていただきます。と思います。

いろいろと勝手を言いますが、どうかお許しください。

神の御子

第5話『神の御子』

・
・
・
・
・

今この空間は沈黙に支配されていた。

無論、神耶はその場のテンションにあわせて唱えた呪文が、まさかここまで高威力だとは思ひもしなかったのである。

そんな中神耶はどうやって言い訳をしようかと頭を悩ませていた。

1人、云々と唸りながら。

その場を見た人間がいたとしたら、どこからどのように見ても変態のそれだっただろう。

そして、この場に自分以外誰もいないというわけではない。

目の前には嫌味なほどに完璧な美貌を備えた女性の姿。

彼女こそ、神耶が言い訳をしなくてはならない相手だった。

尤も、ここまでしてしまった以上言い訳など不可能に近いのだが。

「
・
・
・
」

「
・
・
・
」

誰も、何も話さない。

否、そういうと少し表現に差異があるかもしれない。

この場にはこの2人以外存在しないのである、つまり2人は何も話

さない、が正解だろうか。
至極、どうでもいいことではあるが。

そもそも、なぜこの場に何も無いのかというと、答えは簡単『消滅した』からである。

否、またまた表現に小さな差異があつたように思う。

物事は正確に表現するべきかもしれない。

正確には『消滅させた』のである。

そう、その言葉のとおり、追いかけてきていた盗賊風の男達や動物、そして木や草花でさえ文字通り消え去っていた。

今ここは辺り一帯平地であり、その中心に2人の男女が向かい合っているだけであつた。

「・・・あの、さ。」

そう切り出したのは神耶である。

この沈黙に耐え切れなくなったのだろう、言いづらそうにそういつた。

女性は答えない。

「さっきの呪文だけど・・・あれは古代魔法、俺も一応魔法使いなんだよね・・・。」

そう、神耶が悩み抜いてたどり着いた答え、それが、自分も実は魔法使い、ということだった。

先ほど古代魔法を使ったことを考えると、下手に否定するとかえって怪しまれる為こうするしかなかったようである。

尤も、それ以外どうしようもなかった、というのが実際のところであるが。

「・・・そうみたいね。」

クリスはその強烈な眼光を神耶に向けながら、怒りの収まらないといった様子でそういった。

「いや、その・・・、黙ってたのは悪かったと思うよ?」

そう、そもそもなぜクリスが怒っているのだろうか。

その答え、それは神耶が魔法使いであることを秘密にしていたからである。

それかなり高位の魔法使いであるということ。

神耶にとってすれば、自分の使った魔法のレベルがどれほどの物なのか分からない。

比べる対象を持ち得ない神耶にとって見れば、それは当然のことだった。

よって、凄い高威力、という程度の認識でしかなかった。

だが、クリスは違った。

この世界で技術を学び、魔術を学び、そして魔法を学んだ。

戦場に出たこともあったし、瀕死の人間を救ったこともあった。

そして、世間では『白の魔女』として恐れられていることも自覚していた。

そんな彼女の眼からしても、神耶の力は異常だった。

神耶の放った魔法、それは古代魔法の中でも高位にあたる呪文である。

それを唱えられ、発動することが出来る術者は、おそらくこの世界に5人いればいいほうだろう。

まして、息も切れず疲れた表情すら見せないなど、現実にはありえるはずが無かったのである。

「あなたは・・・、強いよね。
それも途方も無く・・・。」

クリスが唐突にそう呟いた。

このときクリスの中にあつたのは悔しさだろうか、それとも羨望だろうか。

勿論、誰にも分からないことだった、本人のクリスにさえも・・・。
だがこのとき、クリスは確かに自身の中に沸々と怒りのようなものが湧き上がってくるを感じた。
ふっ、怒りとは自覚するものではないはずだろう、とどこか心の中でそう自嘲する。

「ま、まあ、魔法しか取り柄が無いから・・・。」

そう、引きつった笑みのまま返す神耶。

見るからに、何か隠しています、という態度であるが、クリスは気にしなかったようである。

むしろ、神耶自身を見ていなかったのかもしれない。

「これでも私は数々の修羅場を潜り抜けてきた。
友人と作った傭兵団で。

だけど先の男達とその仲間に殺された、私を除くすべての団員が・・・。」

突然身の上話を始めたクリス。

そのあまりの重い内容に神耶は口を挟むことすら出来なかった。

そうして自身の身の上話をしたクリスは、自身の中にあつた怒りのような何かが薄らいでいくのが感じ取れた。

そうしてしまえば後は早いもので、すぐに冷静に判断する能力が戻る。

そして冷静に考えられるようになると、自身のなかにあつた何かの正体に気づくのだった。

もしあの時、神耶があの場合にいたならば。

という、もしも、の話。

あまりに理不尽に仲間を殺されたクリスは、理不尽に神耶にその感情をぶつけていただけだったのである。

「私は、自分の無力さを呪つたよ・・・。

そして私は思った。

なぜ貴方があの時あの場合にいてくれなかったのか、とね。

ごめんね、私は気が動転していたみたい、助けてくれてありがとう。

」

そう言つて、恥ずかしそうに神耶へと頭を下げた。

「いや、そんなこと別にいいよ!？」

俺が力を隠してたのは事実なんだから!」

という神耶の必死の言葉に、クリスは少し表情を和らげるのだった。

「それにしても、なぜあなたほどの魔法使いが有名にならなかったの……？」

あなたほどの魔法使いなら名前ぐらい噂されてもいいのに。」

先ほどの落ち込みようから少し調子を戻しながらクリスはそういった。

「……まあ、今まで敵にあつたら逃げ回ってたからね。」

と神耶。

「そう……。」

ではなぜあの時魔法を？」

とクリス。

「いや、だって女性が襲われてるんだよ？」

男だったら助けるでしょ、普通。」

と、当たり前だというかのようにならう。

当然、この世界では弱肉強食の世界である。

自分に被害がある可能性をかえりみず、助ける人間など稀有である。

尤も、それは神耶がいた世界でも同様のことが言えるが。

「そう、か……。」

まるで神の使いね。

差し詰め『神の御子』といったところかな……？

本当にありがとう、シンヤ。」

「いや、もうお礼はいいって！」

とその時。

~~~~~!~~~~~

そう、神耶の腹の虫が鳴くのだった。

突然の音に耳まで真つ赤になる神耶。

それを見て、何か悪戯を見つけたかのような顔をするクリス。

「ふふっ、お腹すいてるんだ？」

お礼に美味しいご飯をご馳走してあげる！」

と突然宣言するクリス。

「いや、いいって!？」

別にお礼なんていらなから！」

と、顔を真つ赤にさせながら叫ぶ神耶。

だが、やはり男は女には勝てない定めなのだろうか。

「いいからはやく！」

クリスはそう言ったかと思うと、神耶の服の袖を掴み走り出すのだった。

この時2人は思いもしなかった。

『白の魔女』と『神の御子』との出会いが、後に偉大な傭兵団を築

く礎となったということを・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4906f/>

---

ヴァルハラ<sup>の</sup>輝石

2010年10月28日05時46分発行